

教会暦と聖書の流れ

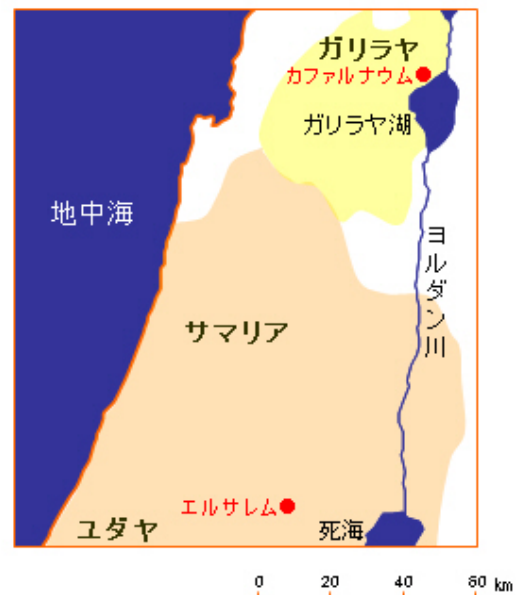
エルサレムに向かうイエスの旅は十字架に向かう旅、十字架を経て天に上げられる旅でしたが、それはまた神の国を告げ、神のいつくしみをあらわし続ける旅でもありました。ルカ福音書はこの旅の間に、イエスのさまざまな言動の記録を伝えています。きょうの話もその中での出来事であり、ルカ福音書だけが伝える出来事です。

福音のヒント

(1) 紀元前10世紀、ソロモン王の死後、北イスラエル王国は南のユダ王国から政治的に分裂し、エルサレムの神殿とは別の聖所をサマリアのゲリジム山に作り、宗教的にも分離してしまいました。紀元前8世紀には北王国はアッシリア帝国に滅ぼされ、サマリアの人々はアッシリア人との混血になり、南のユダヤ人とは民族的にも分かれてしまいました。このような経緯で、ユダヤ人とサマリア人は反目し合うようになっていたのです。

きょうの福音の場面は「サマリアとガリラヤの間」とありますが、正確な場所はよく分かりません。話の中にサマリア人とユダヤ人が一緒に出てくるので、それに合わせた場面設定だとも言えそうです。

なお、イエスが育ったガリラヤ地方は、ユダヤから見てサマリアよりもさらに北にありましたが、ある時代に、南のユダヤ人が入植して町や村を作ったので、人種的にも宗教的にもユダヤ人との同一性を保っていました。つまり、ガリラヤの人々はユダヤ人なのです。



(2) ユダヤ人とサマリア人は、共にモーセ五書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)を正典としていました。その中には次のような規定がありました。「重い皮膚病にかかっている患者は、衣服を裂き、髪をほどき、口ひげを覆い、『わたしは汚(けが)れた者です。汚れた者です』と呼ばわらねばならない。この症状があるかぎり、その人は汚れている。その人は独りで宿営の外に住まねばならない」(レビ記13章45-46節)。

反目し合っていたユダヤ人とサマリア人が一緒に行動していることは普通ならば考えにくいことです。しかし、重い皮膚病の人々は、それぞれが本来属していた共同体から排斥されてしまっていて、その中で苦しむ者同士として支え合い、助け合いながら生活していたのでしょうか。人と人とお互いの違いを超えて苦しみの中での連帯する…そういうような経験はわたしたちの周りにもあるのでしょうか。

(3) なぜイエスは「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」(14節)と言われたのでしょうか。当時の社会では、この病気を宣告するのも、治癒(ちゆ)を宣言するのも、

祭司の役割でした。肉体的に病気が治っても、祭司によって「清め」の儀式をしてもらわなければ、社会復帰ができないのです。イエスはその人の神とのつながりを回復するだけでなく、その人がもともと所属していたコミュニティとの関係を取り戻すことを意図しておられたとも言えるでしょう。なお、ユダヤ人とサマリア人は別々の祭司を持っていたので、彼らは、別の場所へ出かけていったはずで

(4) きょうの福音から、「もっともっと感謝と賛美の心を持たなければならない」という教訓を受け取るのは当然のことでしょう。しかし、「感謝し、賛美する」というのは、義務感から来るものではないはずで

むしろ自然に心の中からわき上がるのが、賛美と感謝なのではないでしょうか。どうしたら心から賛美し、感謝することができるかを考えるために、自分をこの福音の場面の中に置いてみて、このサマリア人の立場からこの物語を味わって見たらどうでしょうか。病気が治った人々はもちろん皆、喜んだはずで

しかし、祭司のところに行く前に、「感謝し」(16節)「賛美するために戻ってきた」(18節)のはサマリア人だけでした。それはなぜなのでしょう

この10人は皆「清くされた」(14節)のですが、1人のサマリア人だけが「自分がいやされたのを知って」(15節)とされています。「知る」は直訳では「見る、分かる」です。この人がはっきりと意識したことは、「自分がいやされた」、つまり、「神がこの自分をいやしてくださった」ということだったので

しょう。他の人と違って、そのことを明確に意識したからこそ彼は賛美し感謝することができたのだ、と言えるのではないのでしょうか

もう一つ考えられることは、イエスというユダヤ人が民族の壁を超えて、自分にも目をかけてくださった、ということの中に、ほかの人(ユダヤ人)以上の感謝を感じたということかもしれません。「この自分にまでも！」という驚きと感動が、彼の行動の背景にはあるといえるのではないのでしょうか

どちらも、わたしたちの中に似た経験があるかもしれません。わたしたちが、本当に神に感謝し、神を賛美するのはどんなときでしょうか

(5) 「あなたの信仰があなたを救った」(19節)という言葉は福音書に何度か出てきますが、考えてみれば不思議な言葉です。「神があなたを救ってくださった」というほうが自然なのではないのでしょうか。しかしイエスは意外なほど「信仰」の力を強調しています

重い皮膚病だったこのサマリア人の「信仰」とは何でしょうか？ それは、この人が自分の病気が治ったことを「神がいやしてくださったこと」として受け取ったということではないのでしょうか。自分の身に起こった出来事の中に神とのつながりを発見すること、自分の現実の中に神の働きを見ていくこと、それがここでいう信仰だと言えるのかもしれませんが

また、この箇所で、その「信仰があなたを救った」というときの「救い」も、病気がいやされたことであるというより、この人が心から感謝と賛美を生きる者となった、そのこと自体だと言ってもよいのではないのでしょうか。なお、この箇所のすぐ後に「神の国はあなたがたの間にある」(ルカ17章21節)というイエスのことばがあります。イエスは、きょうの出来事のように、民族の違いを超えて、神の救いの喜びが広がっていく現実の中に、神の国の実現を見ていたので

しょう。今のわたしたちは、どのように信仰と救い、賛美と感謝、神の国の現実を生きているのでしょうか